

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：34417

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2019

課題番号：26861887

研究課題名(和文) 神経難病看護のコア技術を基盤とした援助指針の開発

研究課題名(英文) Development of nursing care for people with intractable illness focusing on core nursing skill

研究代表者

大原 千園(OHARA, Chisono)

関西医科大学・看護学部・講師

研究者番号：90376202

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、パーキンソン病患者の「身体性」を意識することが、コア技術の一つではないかと考えた。報告者が看護援助をしながら収集したデータを質的統合法(KJ法)で分析し、「パーキンソン病患者への身体性を意識した看護援助の構造」が明らかとなった。【身体性と生活の連結】や【身体性を刺激】など、特徴的な7つのシンボルマークが示された。結果を基に、研究会議を繰り返し、「パーキンソン病患者の身体性を意識した看護援助指針(案)を作成し、7つの視点と看護援助の方向性及び具体例が明らかとなった。今後は、臨床現場の看護師の実践を通して、実践適応性を高めるための検証を行う。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で明らかとなった「パーキンソン病患者への身体性を意識した看護援助の構造」より、長年パーキンソン病と付き合いしてきた患者が、身体とどのように折り合いをつけてきたのか、何に価値をおいて生き、これらどのように生きようとしているのかを看護師が理解する一助になると考えた。また、今、患者がもつ苦悩や気掛かりを看護師とともに整理し、難病で先が見通しにくい患者の人生を共に考えるきっかけを意図的にもつことが可能となる。また、看護援助指針(案)は、パーキンソン病患者への看護の方向性を示し、体系化をすすめる上での基盤になると考えられた。

研究成果の概要(英文)：We hypothesized that focusing on patients' embodiment may help nurses to provide more personalized, individual care and improve their expertise in caring for people with Parkinson's disease (PD). This study explored nursing care provided for people with PD, particularly care focused on embodiment. We identified seven different areas of care focused on embodiment: "Linking embodiment to lifestyle", "Stimulating embodiment", et al. These seven areas are closely linked and may help nurses develop their practice with people with PD. The focus on patients' embodiment helps nurses to develop relationships with people with PD based on mutual trust.

研究分野：看護学

キーワード：神経難病 パーキンソン病 身体性 看護援助指針 看護学 ケア

## 1. 研究開始当初の背景

神経難病とは、脳を中心とした神経細胞が変化した結果起こる病気の総称であり、パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症、重症筋無力症、多発性硬化症、多系統萎縮症などがある。これら疾患をもつ患者の多くは、大学病院をはじめとする専門病院で診断を受けた後、疾患に応じた治療を受けながら生活を送る。その疾患の多くは進行性であり、患者は症状の悪化と共に、徐々にADLの低下を余儀なくされ、療養を中心としている病院や高齢者施設、又は、介護を受けながらの在宅での生活を送る。神経難病といっても、厚生労働省が指定する神経・筋疾患だけでも30以上あり、また、診断がつかない場合も少なくなく、対象とする疾患特性は幅広い。また、難病という治療方法が確定しない中での先端医療の選択や意思決定、ADLの低下に対する日常生活援助、年単位になる長期療養を支える介護者のサポート等、その看護には幅広い知識と経験が要求される。

平成23年度に厚生労働省が報告している患者調査の概況によると、平均在院日数は32.8日であり年々短縮傾向にある。入院期間が短い中で、神経難病患者の看護に携わる看護師は、患者のその時の身体状態を把握した直接的な看護援助をするだけでなく、今後起こりうる可能性を見据えた患者への教育的な援助や家族への援助、加えて、転院先との調整や社会資源の活用を検討しながら、患者のQOLの向上を目指した看護援助を実施する必要がある。しかしながら、神経難病看護に関する先行研究では、神経難病看護全般の特徴を明らかにしたものはほとんどない。神経難病患者数も増加しており、その専門性が求められる中、看護実践が積み上げられることなく現在に至っている現実があると考えられる。そのため、報告者のこれまでの臨床経験からも、神経難病患者の特徴の一つである運動機能障害に着目した看護援助が中心になりがちであり、また、指針がないために、看護師それぞれの力量に任されていることも少なくなく、看護援助の質を保証できているとは言えない現状がある。

海外諸国では、神経難病患者への看護は、Parkinson's disease Nurse Specialistの様に疾患ごとの看護師が存在し、システムが構築されている。その看護師の多くは、薬物調整や治療継続を目的とし、患者の身体機能の変化をアセスメントし、医師と連携しながら薬剤の調整を行っている。日本では、慢性疾患看護専門看護師が全国に84名、うちサブスペシャリティを神経難病とする専門看護師は数名であり、多くの神経難病患者を専門的に援助している看護師は数少ない。日本では、海外諸国と比較すると在院日数が長いため、入院時の看護援助が、その後の自宅での生活のQOLを左右する。また、在宅医療においては、社会資源は充実してきてはいるものの、家族の介護なしに療養生活を送ることは難しい現実があるため、患者が入院している期間の中で、患者や家族のその時限りの看護援助だけでなく、長期的な視点も含めた看護援助が不可欠である。

報告者のこれまでの研究結果(亀石, 2013)から、パーキンソン病患者の場合、患者が変わり続ける身体を受け入れるためには、患者が自らの身体について言語化する場と他者の共感の必要性が明らかとなり、また、先行研究(Payne, 2010)と日本の現状の比較からは、その時だけではなく、その後の疾患の悪化や緩解を予見した上での看護援助の必要性が考えられた。運動機能障害への援助だけではなく、患者が病気とともにその人らしく生きていける様な専門的な援助が求められていると考える。そこで、本研究では、神経難病看護のコアとなる技術を明確にし、そのコア技術を基盤とした援助指針の開発と看護介入を行うことで、神経難病をもつ患者の特徴に合わせた看護援助の提供を目指す。

## 2. 研究の目的

本研究では、神経難病看護のコアとなる技術を明確にし、そのコア技術を基盤とした援助指針の開発と看護介入を行うことを目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 援助指針作成のための中心概念の整理

神経難病看護に関する文献検討、及び、報告者のこれまでの研究結果をまとめ、援助指針作成のための中心概念の整理を行った。当初の予定では、神経難病をもつ患者全般を対象とする予定であった。しかしながら、その場合、開発される看護援助指針の具体性が乏しくなり、患者の特徴に合わせた介入が困難になるのではないかと、文献検討、及び、研究会議により予測された。そのため、まずは第一段階として、報告者がこれまでに研究対象としてきたパーキンソン病、多発性硬化症の患者を主な対象者として選定し研究を進め、その結果を検討しながら、徐々に、対象者の疾患属性を広げていくこととした。

パーキンソン病患者を対象とした既存のインタビューデータをもとに、看護質的統合法(KJ法)を用いて、個別分析を実施した。その結果を検討した結果、「身体性」を意識することがコア技術の一つとして位置付くと考えられた。

#### [用語の定義]

身体性：身体の性質。客観的な身体状態のみならず、患者の主観的な身体に対する思いや感情も含むもので、これまでの経験の中で培われた身体、ままならない中でも工夫しながら生活する身体、社会や人との関係づくりを行う身体 といったその人固有の身体のあり様。

#### (2)パーキンソン病患者の身体性を意識した看護援助の構造化

##### 対象者

神経内科病棟に入院中のパーキンソン病患者 6 名。

##### データ収集方法

報告者がその日の受け持ち看護師の一人として、看護援助を実践した。その時の会話や何げない日常会話を通して、自らの身体に興味・関心をもっている場面を報告者が察知し、その時の対象者の言動・表情、報告者の言動・思ったこと・感じたことをプロセスレコード形式でフィールドノートへ記載しデータとした。また、場を設けて話をする際には、対象者の身体状態に十分に注意を払い、プライバシーの保てる場において、対象者の了解を得て録音し逐語録として記載したものをデータとした。

##### データ分析方法

質的統合法(KJ 法)を用いて分析を行った。報告者が身体性を意識していると捉えられた場面の報告者の言動とその意図を 1 枚のラベルに表現しラベルを作成し、分析を行った。

### 4. 研究成果

#### (1) パーキンソン病患者の身体性を意識した看護援助の構造化

パーキンソン病患者 6 名分のデータから抽出された元ラベルは全部で 619 枚であり、多段階ピクアップで 16 段階を経て、元ラベルは 199 枚となった。それらのラベルの意味の類似性によるグループ編成は、8 段階を経て、以下の 7 つのシンボルマークのグループに統合された。

##### 【これまでの身体性の傾聴】

看護師は、患者が自分なりに思っている病気の兆候や症状の変化 - 今と昔を比較して、できなくなったことや体の変化、体にもつイメージの変化、逆に治療により良くなったこと - について、医学的根拠や整合性は問わず、時制に注意しながらこれまでの流れを理解し、また、それらの話を聞いて思ったことを患者に伝えた。

##### 【固有の身体性への理解】

看護師は、身体状態の正確な把握と、患者に症状へ意識を向けてほしいという思いから、患者のペースに合わせてつても看護師が納得いくまで症状について言葉で説明してもらい、患者独特の表現やよく使う単語を大切にし、時には、その内容を要約して患者へ伝え確認をとりながら理解し、併せて、聴診、触診、表情や顔色などの観察をし、把握した状態をもとに、患者へパーキンソン病の傾向、注意点や対処方法、生活についての話をした。

##### 【身体性と生活の連結】

その時々調子の良し悪しに合わせた生活のペースを最も理解しているのは患者であるため、看護師は、まずは待ち、患者の様子をみながら動きや気持ちの変化、薬効の予測をし、必要に応じて自宅での生活が快適になるような道具や社会資源の調整をし、これまで通りの安全で楽に体を動かしながら、これまで通りの生活できるようにした。

##### 【身体性を刺激】

看護師は、患者に直接触れたり、見せたり、言葉をかけたりする中で患者の五感に働きかけつつ、患者の関心・気がかりを大切に、楽しい・快適と感じられるような援助を模索しながら、実践した。

##### 【身体性の浸透】

症状や薬への心配ごとや思うようにいかないもどかしさ、医療者への濟まないという気持ちが絶えない患者に対し、看護師は、できていることを認め、励まし、少しでも自信をもってほしいと思いつつ、一人の人間としてもった感情をその場で伝えたり、時には厳しいことも言いながら、病気のことを超えてある意味で同志でいたいと思った。

##### 【これからの身体性を見つめる】

病気の進行、寝たきり、寿命、死、これからの生き方という何となく話ずらいことに関して、看護師は、ゆっくり話をしたり、言葉を繰り返したりする中で自然と患者から本音が出てくるのを待ち、必要な時には、「死」という言葉を用いながら事実を衝撃が最小限になるように伝え、その時の様子や気持ちを改めて確認した。

### 【社会や人と繋がる身体性の理解】

体の動きや見た目、臭いに変化が生じ、他者との交流や役割遂行に変化が生じたこれまでの経験を伺いつつ、今現在患者がおかれている病院という社会の中での患者の様子を観察し、看護師は、同じような病気の人の存在で気持ちよくなる時があれば、存在を無視できない現実、関わりの浅い人へはできないことを知られたくないという思いがあることがわかった。

#### (2) パーキンソン病患者の身体性を意識した看護援助指針(案)の作成

上記研究結果を基に、看護援助指針(案)を作成した。各シンボルマークを看護援助の大きな方向性と捉え、シンボルマークを構成している元ラベルをすべて精読した。シンボルマークの内容を象徴するような具体例、援助の方向性を表す具体例を抽出した。臨床現場の看護師が、実際に、どのように思考し、どのような行動するのが具体的に理解できるように、表現を工夫し、記述した。

#### (3) 考察

本研究で明らかとなった「パーキンソン病患者への身体性を意識した看護援助の構造」より、長年パーキンソン病と付き合いしてきた患者が、身体とどのように折り合いをつけてきたのか、何に価値をおいて生き、これからどのように生きようとしているのかを看護師が理解する一助になると考えた。また、今、患者がもつ苦悩や気がかりを看護師とともに整理し、難病で先が見通しにくい患者の人生を共に考えるきっかけを意図的にもつことが可能となる。また、看護援助指針(案)は、パーキンソン病患者への看護の方向性を示し、体系化をすすめる上での基盤になると考えられた。

#### (4) 今後の課題

今後は、看護援助指針(案)を臨床の看護師の実践を通して、実践適応性を高めることを目指す。また、病院だけではなく、訪問看護やデイサービス、高齢者施設など、多様な現場での特徴を生かした援助指針となるよう対象者を幅広く検討していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Chisono Ohara, Yasuko Shimizu, Nobuko Kawai, Natsuko Seto, Mariko Tanimoto, Harue Masaki
2. 発表標題 Nursing care for Patients with Parkinson's Disease from the Perspective of Corporeality
3. 学会等名 TNMC&IWANS International Nursing Research Conference 2017 October20-22 Bangkok, Thailand (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大原千園, 清水安子, 正木治恵
2. 発表標題 パーキンソン病患者の身体性を意識することで見えた看護援助の視点
3. 学会等名 第22回日本難病看護学会学術集会 2017年8月 東京
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Chisono Kameish, Mariko Tanimoto, Natsuko Seto, Yasuko Shimizu, Harue Masaki,
2. 発表標題 A case report on nursing support for hospitalized Parkinson's disease patients: Focusing on changes in patients as a result of nursing support
3. 学会等名 The 35th International Association for Human Caring Conference
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 大原千園, 瀬戸奈津子, 清水安子
2. 発表標題 仕事をもちながら10年以上治療を継続している多発性硬化症患者の事例分析
3. 学会等名 第19回日本難病看護学会学術集会
4. 発表年 2014年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----